OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ラシカッタという言い方についての覚書
Author(s)	福田, 嘉一郎
Citation	詞林. 1993, 14, p. 57-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67341
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ラシカッタという言い方についての覚書

福田 嘉一郎

はじめに

現代語の助動詞ラシイは、ラシカッタという言い方の存在によって、外界の事態を描き取って表す客体的表現と、描き取った事態についての話し手の判断を表す主体的表現との、中間的・両面的性格をもつと解せられることが多い。本稿ではこのような考え方に批判を加えつつ、文末のラシカッタが通常の文法論的解釈の埒外にあり、語りにおいて「語り手の発話時における」以外の推量判断を表す、特殊な文体の一つと見るべきであることを明らかにする。

1 問題点

1．1 現代語の助動詞ラシイは、一般に命題に対する話し手の推量判断を表す主体的形式であるとされる。そしてその文法的特徴として、否定化や疑問化に抵抗することなどがよく挙げられる（cf.寺村1984）。

（1） 太郎は来るらしい。

（2）a. 太郎は来ないらしい。

b. *太郎は来るらしくない。

（3）*太郎は来るらしいか？

（4）*誰が来るらしい？

これらの特徴は、描き取られた外界の事態を表して文の命題を構成する客体的形式とラシイとの相違を示すものと考えられている。

ところが、ラシイは過去化を許容する。すなわち、ラシカッタという言い方が可能である。

（5）a. 太郎は来るらしい。

b. 太郎は来るらしかった。

c. 太郎は来たらしい。

d. 太郎は来たらしかった。

この現象は、ラシイを主体的形式と見る立場にとって都合が悪い。主体的表現とは、話し手の、発話時における、ある主体的態度を表すということであるから、それ自体は打ち消されたり疑われたりすることがないとともに、回想もされ得ず、したがって主体的表現を受け持つ形式は、過去化されてはならないのである。

そこでこうした問題に対して、次のような解釈が与えられてきている。すなわち、ラシイは客体的表現と主体的表現との、中間的あるいは両面的性格を有し、(5)a.、(5)c.のように非過去形で言い切ったときには、主体的形式として機能するが、(5)b.、(5)d.のように過去形をとったときには、客体的形式として機能する、というものである（cf.仁田1991）。このような考え方の出発点となったのは、渡辺1971であると見られる。そこでは、ラシイ、ナイ、タといった「第2類」の助動詞は「一旦は統叙（叙述〈一つの思想や事柄の内容を外形化してととのえようとする言語主体の表現活動〉を統一完了するための職能）の外ではたらきながら、結局は統叙の一種にすぎず、このような二重性格があるという意味で統叙の延長としてはたらく。」とされ、また、「統叙と陳述（統叙によってととのえられた叙述内容〈または無統叙の素材的要素〉に対して、言語主体が、その素材〈あるいは対象・聞手〉と自分自身との間に、何らかの関係を構成する関係構成的職能）とは、一旦は明瞭に区別されねばならないけれども、結局は相互に連続すると認めるべきである。」とも述べられている。

1．2　しかしながら、ラシイに対する以上のような考え方が、その主な根拠としているラシカッタという言い方には、なお十分に説明されない、注意すべき文法上および文体上の特徴がある。

まず、ラシカッタという過去形をとったときには、ラシイは客体的形式としてはたらくと言われているけれども、ラシカッタとなって疑問化を許容するようにはならない。

(6)a. *太郎は来るらしいか？
　　b. *太郎は来るらしかったか？
(7)a. *誰が来るらしい？
　　b. *誰が来るらしかった？

次に、ラシイの前の述語には非過去形と過去形の対立があるから、ラシカッタの前で述語が過去形をとると、～タラシカッタとなって、1文の中に2回タが現れることになる。

(8)　太郎は来たらしかった。
(9)　雨は激しかったらしかった。
(10)　海は穏やかだったらしかった。
(11)　太郎が犯人だったらしかった。

～タラシカッタで終わる文は、述語が一つなので単文のはずである。しかし、単文の中に2回タが現れるという構文は他に存在しない（本稿で、カモシレナイ、ニチガイナイ、ヨウダ、ハズダといった助動詞句をとり上げないのは、形式的にせよ複文をつくるそれらをひとまず除いて、厳密を期するためである）。

ラシカッタという言い方に見られるこれらの文法的特徴は、従来看過されがちであったように思われる。それは、助動詞の相互承接順位に基づく、いわゆる日本語文の階層構造モデル、例えば、

(12) 命題核＋ヴォイス＋アスペクト＋肯否＋テンス＋モダリティ。

客体的表現←――――――――――――→主体的表現

のようなものが、無条件に想定されていたためではなかろうか（cf.野村1990）。

さらに、ラシカッタという言い方には、上の文法的特徴に加えて、次のような文体的特徴が認められる。すなわち、一般にラシカッタは話しことばでは用いられない。

(13) A「太郎はどんな様子だった？」

B「うん、*ここへ来るらしかったよ。」(cf.…来るようだったよ)

ラシカッタが用いられるのは、主に物語の地の文においてである（cf.金子1989、同1990）。とすれば、先の(６)b.、(７)b.の非文法性も、実際はむしろこの文体上の制約によると言えるであろう。

本稿は、以上のようなラシカッタという言い方の文法的・文体的特徴を説明すべく、ラシカッタの真の性格を探ろうとするものであるが、その前に、この問題に関わる興味深い論考、丹羽1992があるので、いくらかこれについて述べておくことにする。

２　丹羽1992について

２．１　丹羽1992は、ラシカッタを含む推量形式の過去形（カモシレナカッタ、ニチガイナカッタ等）を、「「語り」の時制と叙述の視点」という角度からとらえる。語り手が、語る現在から視点を過去に向けることを「回想視点」、物語世界の当該場面の時点（「場面時」）に立った視点をとることを「共時視点」と呼び、「語り」では視覚的な場面描写が多く、場面というのは空間的存在であるから、これを描写するためには、その空間のどこかに視点を置く必要があり、したがって過去形で語られた文においても、場面描写である以上、共時視点をもっていなければならず、「語り」の中の多くの部分では、過去形の文に回想視点と共時視点が共存している、とする。そして、推量形式の過去形は、共時視点の推量を表すと同時に、回想視点で過去のこととして語るという、二つの視点の共存を示す形式である、と説明するのである。

２．２　しかし、丹羽1992にはいくつかの疑問点がある。その一つは、「視点」という概念が言語学上の用語として明確でないことである。言語学的視点に関する研究では久野1978がよく知られており、丹羽1992も「久野（一九七八）は、単文に限定してはいないが、「カメラ・アングルの一貫性：単一の文は、単一のカ

メラ・アングルしか持ち得ない。」という制約を提出している。だから、二つの視点が共存するというのは奇異に思えるかもしれない。」と述べているが、久野1978における視点（カメラ・アングル）とは、文中のある名詞句の指示対象に対する話し手の共感（自己同一視化）の度合すなわち「共感度」と、他の共感度との大小関係のことであり、丹羽1992の言う視点とは内容の隔たりがあるように思われる。次の例を見られたい。

(14) 太郎は例年、花子にクリスマスプレゼントをくれるらしかったが、その年は何も {a.*やらなかった／b. くれなかった} 。

丹羽1992によれば、ラシカッタは共時視点と回想視点の共存を示すのであるから、(14)について、丹羽1992の共時視点、回想視点を、それぞれ久野1978の「クレルの与格目的語寄りの視点」「中立的視点」に読み替えると、従属節の視点は「花子」寄り＋中立となり、続く主節では中立的視点を表すヤルが用いられ得ると予想されるにもかかわらず、(14)a.は不適格である。

そこで、久野1978からは離れて丹羽1992の視点を理解することもできる。しかしその場合、「語る現在から視点を過去に向ける」回想視点と、話し手が事態を発話時以前に位置づけて描く、いわゆる過去テンスとはどう異なり、また「場面時に立った視点をとる」共時視点と、話し手が事態を持続過程の途中にあるものとして描く、いわゆる動詞の継続相アスペクト（cf.高橋1985）や、形容詞・形容動詞に与えられた状態的意味とはどう異なるのであろうか。この点が明らかにされなければ、主として場面描写に用いられる、

(15) 太郎は本を**読んでいた**。

(16) 雨は**激しかった**。

(17) 海は**穏やかだった**。

のような、動詞の継続相過去形や、状態的述語の過去形は、すべて共時視点と回想視点の共存を示すことにならないであろうか。そうなると、これらの形式は話しことばで自由に用いられるのであるから、推量形式の過去形だけが話しことばで用いられない理由は説明できない。

もう一つ、丹羽1992が「「基〔基本形＝非過去形〕かもしれなかった」……は過去においてそう推量される状況にあったことを、今表明するというのではない。語り手が共時現在・未来視点に立って発話時と一致した場面時からの推量を表し、かつ回想視点に立って過去のこととして語るということにおいて、過去形でありながら発話時における推量であることが可能なのである。」と述べる点も疑問である。物語の発話時とは、語り手が語る時点であって、それ以外ではあり得ない。丹羽1992は「発話の現在」についてのコンセンサスに背いている。

3　～ラシカッタの用法・意味

3．1　ラシカッタという言い方は前述のように、物語の地の文や回顧録などの、語りの文章でしか用いられない。以下では、語りの代表である小説に見られる、文末のラシカッタ（～ラシカッタとする）の例について考察する。

～ラシカッタの用法は、ラシイの関わる推量判断の主体によって大きく二つに分かれる。その一つは次のようなものである（作品名に続く①は１人称小説であることを、数字は用例の存在頁を示す）。

(18)「消しますよ」

千三が封筒を取り出すのを待って、春枝が電燈のスイッチをひねった。茶の間からの燈に向かって、三人は歩を移した。

春枝は、どちらかの脚が不自由**らしかった**。

（永井龍男『青梅雨』246）

(19)　幾代は、悲しみを運んでそこまで歩いてきた。顔を上げているので、瞼をあふれた涙が頬に筋を引いた。が、幾代は、水道のそばを通り抜けぎわに、蛇口の栓を閉めた。音を立てて落ちていた水がとまった。が、幾代は自分のその動作に気づいてはいないらしかった。それは無意識に行われただけだった。　（佐多稲子『水』267）

(20)　私達は小さな筏(いかだ)を見つけたので、綱を解いて、向岸の方へ漕いで行った。筏が向の砂原に着いた時、あたりはもう薄暗かったが、ここにも沢山の負傷者が控えているらしかった。水際に蹲っていた一人の兵士が、「お湯をのましてくれ」と頼むので、私は彼を自分の肩に依り掛からしてやりながら、歩いて行った。　（原民喜『夏の花』①304）

(21)　病室に入ると、Aの寝姿は冷静で、死の迫っているらしい趣きは見えなかった。Aの妻女は夜具の裾の方にいて、時々足でも揉んでいるらしかった。Aは視力もないであろうし、私達の方を見ようともしなかった。

（正宗白鳥『今年の秋』①110）

このような～ラシカッタの中の助動詞ラシイは、それが客体的形式であるか主体的形式であるかはしばらく措いて、語り手の推量判断に関わりがあるということについては異論がなかろう。そしてその推量判断が、発話時すなわち語り手が語る時点ではなく、場面時すなわち語りの中のある時点でのものであることも明らかであろう。さて、語り手の場面時における推量判断は、単なるラシイで終わる文（以下～ラシイとする）によっても表される。いわゆる「真性モダリティをもたない文」（cf.野田1989）である。

(22)「うむ。あれァたしか。明治三十七年……て云うとむかしも昔、大むかしだ。」

一体こういう人達には平素静に過去を思返して見るような機会も、また習慣もないのが当前なので、鮫屋の爺さんは人にきかれても即座には年数を数え戻すことができないらしい。煙草を一吹して、

「あの時分にゃおれも元気だったぜ。」

掌(てのひら)で顔中の油汗を撫でたなり黙り込んでしまった。

（永井荷風『勲章』①60）

(23) ひでの耳もとで、春枝が金額をくり返した。

「それでも、よくまあ、それだけに」

ひでは呟きながら、洗いたてのピンと張った敷布の上で、膝のまわりを手さぐりした。脱け毛を拾っているらしい。（青梅雨248）

(24) 私は夜明け前に岡山に着いて、そこから引返して、最近開通した汽車に乗り、バスに乗り移って、郷里の停留所で下りると、愛敬のある若い女性が、「荷物をお持ちしましょう」と云って私の軽い鞄を持とうとした。この村の女らしくはないのに、どうしたことかと訊くと、「A先生のお見舞に来ました」というのである。Aの教えている岡山の女学校の生徒であるらしい。（今年の秋①108）

これらの～ラシイは、文章・談話の枠に依存した、語りにのみ現れ得る文である。(23)は非１人称小説の例であるが、遍在する語り手が作中人物たちのいるその場において推量判断を行なったものと解せられる。このような場面時の推量判断を表す～ラシイの特徴として、ほとんどの場合、～ラシカッタに置き換えることができる。

(22′)……数え戻すことができないらしかった。

(23′)……拾っているらしかった。

(24′)……生徒であるらしかった。

勿論、小説の地の文に現れる～ラシイが、すべて場面時の推量判断を表すわけではない。次の例(25)、(26)では、語り手の発話時における推量判断を表していると解釈される。そのことは、物語全体を現在に属することがらとして描く、冒頭近くの叙述(27)からも支持されよう。この場合、通常の話しことばの～ラシイと本質的に同じ用法であって、～ラシカッタに置き換えることはできない。

(25) もう一度、悠一はごく最近にも、よそから入り込んで来た人に向って号令をかけた。敗戦後、彼が何十回目かの発作を起していたときであった。この部落に炭の買出しに来た海岸町の青年が、この部落の棟次郎という山持ちと辻堂で一ぷくしていると、悠一が出かけて行って「伏せえ」と号令をかけた。その青年が、戦闘帽のお古に払いさげの兵隊服を着ていたので、悠一の倒錯は尚(なお)さら濃くなっていたらしい。

（井伏鱒二『遥拝隊長』154）

(25′)……*濃くなっていたらしかった。

(26) 与十が当村大字笹山に帰った日に、遥拝隊長の悠一は発作を起して家をとび出していた。彼は、びっこだから歩くのは不得手だが、普通人では登るのに手を焼くような傾斜でも割合うまく登って行く。傾斜面をおりるとき、普通人なら駆けおりるようなことになるのに、悠一はゆっくりとおりて行く。それは狐つきの女に幾らか近いところがあるためらしい。（遥拝隊長173）

(26′)……*近いところがあるためらしかった。

(27) 当村大字笹山でも、ときどき「こうちがめげる〔部落内にどさくさがある〕」ので、部落内のものが困っている。尊らの原因は、元陸軍中尉、岡崎悠一という者の異常な言動による。

岡崎悠一（三十二歳）は気が狂っている。（遥拝隊長152）

では逆に、～ラシカッタは場面時の推量判断を表す～ラシイに置き換えられるであろうか。これは、可能な場合と困難な場合とがある。

(18′)……不自由らしい。

(19′)……気づいてはいないらしい。

(20′)……控えているらしい。

(21′)……揉んでいるらしい。

(28) 爺さんはその時、写真なんてエものは一度もとって見たことがねえんだヨと、大層よろこんで、日頃の無愛想には似ず、幾度となく有りがとうを繰返したのであったが、それが其人の一生涯の恐らく最終の感激であった。写真の焼付ができ上った時には、爺さんは人知れず何処かで死んでいたらしかった。楽屋の人達はその事すら、わたくしに質問されて、初て気がついたらしく思われたくらいであった。（勲章①54）

(28′)……?死んでいたらしい。

(29)「渋谷だよ。地下鉄の終点だよ」

男の声は矢張傷ついた獣のように苦しそうだったが、それでも僕から脱がせる作業の手は休めなかった。そういえば上の方に歩廊の天蓋が見えた。僕は歩廊の壁にあるベンチに寝ているらしい。

外套を剥取ると男は一寸僕の額に掌をあてて、元気で家に帰れよ、と言ったらしかった。そして歩廊を踏む靴鋲の音が遠ざかって行った。僕はそのまま再び深い眠りに落ちた。（梅崎春生『蜆』①430）

(29′)……?言ったらしい。

つまり、ラシカッタの前の述語が過去形で、～タラシカッタとなっているものは、～タラシイに置き換えると不自然なのである。(28′)、(29′)が、語り手の発話時における推量判断を表しているように受けとれるのは、ラシイの前に過去形の述語がある場合、述語は発話時から見た過去のある時点＝場面時の事態を表し、その後ろに接しているラシイは、発話時の推量判断を表す、という解釈が優先されるためと考えられる。

しかしまた、小説の地の文において、～タラシイは場面時の推量判断を全く表し得ないわけでもない。次の例を見られたい。

(30) 老境を突破するまで生き延びた八人の兄弟のうち、誰が最初に死ぬるかとかねて思っていたが、おれでなくってAであったか。Aは白内障に罹って手術をしたが、その後は殆んど書物を読むに堪えないほどに視力が衰えていたそうである。胃腸も悪く、長い間普通食も食べられぬようになっていたらしい。 (今年の秋①105)

(30′) ……?食べられぬようになっていたらしかった。

(31) 私が若しも、Aの葬式の場に立ったとしたら、送別の辞として何と云うべきか。死んだら最後、彼と我とは無縁の人である。死者は死者、生者は生者。親にしろ、兄弟にしろ、絶対無縁であるとすると、言うべき事はないではないか。A自身がすでに自分の危篤状態を兄弟にも知らせるなと、側の者に云っていたらしい。 (今年の秋①112)

(31′) ……?云っていたらしかった。

(30)、(31)は一見発話時の推量判断を表すようであるけれども、『今年の秋』という小説は、「私」がかつて死の直前にある弟の「A」を見舞った際の心境を主に描いており、そのような文章全体の枠組があることによって、これらは語り手の場面時における推量判断を表しているのである（～タラシカッタに置き換えた(30′)、(31′)が不自然である理由については第4章でふれる）。

以上、本節で述べてきたことを整理すると、次の表のようになる。表中「～ルラシイ」「～ルラシカッタ」としたのは、ラシイ、ラシカッタの前の述語が非過去形（または名詞類）の場合を指す。

(32) 小説の地の文における、助動詞ラシイによる、語り手の推量判断に関わる文末の表現：

形式＼判断の時	発話時	場面時
～ルラシイ	○	○
～タラシイ	○	△
～ルラシカッタ	×	○
～タラシカッタ	×	○

3．2　この節では～ラシカッタのもう一つの用法について見てゆく。それは、非1人称小説に限って認められる、次のようなものである。

(33)　若い歴史科の日本人教師がその時、東京にあるきりしたん遺跡について話している途中だった。三十人ほど集まった学生のうしろで男はぼんやりと立っていたが、もちろん、その話が彼の興味をひいたわけではない。むしろノートを熱心にとっている真面目そうな学生やおごそかな白髪の外人司祭の背中を見ているうちに、これは場ちがいな席に出てしまったという後悔の気持ちが起ってきたほどだった。

話はよくわからなかったが家光の時代に札の辻で処刑された五十人の殉教者のことらしかった。　（遠藤周作『札の辻』425）

(34)　女はまだ殻を置かなかった。中身が満えられていたあとに、黒茶色の水々しい筋のついた薄肉が弧を描いて貼り残っている。女はそれをフォークで殺ぐと、大きく殻を傾けて口に移した。磯の水々しさと香と味とを感じ占めるなり、女は今しがたの味わいを奪い合おうとする口中の部分が幾十もあるように感じた。揉み合い方の激しさからすると、そうらしかった。が、女には口中の幾十もの部分が満たされた歓びに一斉にどよめいているようにも感じられた。女の眼の前には、この上ない白さや薄紫や薄青さや銀色などの部分が混り合っている内殻の水々しい輝きだけがあった。口中の幾十もの部分が満されて歓びに一斉にどよめいているのは、そこに貼り残っていた黒茶色の筋のついた薄肉を口に入れた時、そのような水々しい輝きがどっと流れ込んだためであるように、女には思われた。　（河野多恵子『骨の肉』486）

(35)　そう云うそれが葬儀で会うこともないうちに、桂子から劫の結婚を聞いた。あのモーニング着たかなと、ちょっと考えておかしかったが、母は祝いを送ったらしかった。　（幸田文『黒い裾』303）

(36)　桂子は、このごろ酒井さんはひどく劫に機嫌がわるくて、劫も三度に一度は口返答をして困ると、ひそひそ話した。だが劫は、昔からの小まめなやりかたで葬式雑務に手際よく働いて、成功途上にある人の得意さはよほどきびしく押えているらしかった。「千代さん、あなた最近におめでたじゃないの？」と訊いた。あきれた才子だと思った。まだ母にすら云っていない、ついきのう、千代は嫁ごうと心にきめたのだった。

（黒い裾306）

これらの～ラシカッタのラシイは、前節の場合と異なり、語り手ではなく作中

人物、すなわち「男」（札の辻）、「女」（骨の肉）、「千代」（黒い裾）の推量判断に関わりがあるものと見られる。ところが、作中人物の場面時での推量判断もまた、～ラシイによって表され得るのである。

(37) それ以来、母親のたのしいおもい出話は湯治のことにきまってしまった。湯につかって、三年はたしかに生きのびた、といい、宿の広間にかかった旅まわりの芝居を二晩つづけて見たことも忘れられないらしい。ひとりでじいっと縫物をしているときなども、母親はひそかにおもい出しているのかもしれなかった。そばで宿題をしているとき、ふいにそれを話しかけられたりしたことで、幾代はそうおもうのであった。

（水262）

(38) そうして、果物用のフォークを一層華奢に見せている男のしっかりした手が、貝柱を絶ち切ろうとしてフォークを右へ左へ、傾けるたびに力むのに、女は眺め入った。うまく貝柱が切れたらしい。男は小さな巻貝や洗い残りの藻のついている殻ごと縦に口許へ持ってゆくと、ちょっとフォークであしらって、磯の水々しさと香と味とを一気に啜り込む音を立てた。（骨の肉484）

(37)、(38)は、非１人称小説の地の文において、全知の語り手が作中人物、すなわち「幾代」（水）、「女」（骨の肉）の心情に入り込み、作中人物の場面時での推量判断を、自らのそれのように述べたものと考えられる。このような～ラシイも、語りにしか現れない「真性モダリティをもたない文」であり、やはりほとんどの場合、～ラシカッタに置き換えることができる。

(37′)……忘れられないらしかった。

(38′)……切れたらしかった。

逆に、～ラシカッタは原則として、作中人物の推量判断を表す～ラシイに置き換えることができる。

(33′)……殉教者のことらしい。

(34′)……そうらしい。

(35′)……送ったらしい。

(36′)……押えているらしい。

しかし、ときに置き換えられない場合もある。次を見られたい。

(39) 遥拝隊長は輸送船のなかで、部下に遥拝させること以上に、兵隊に訓辞をするのが好きらしかった。訓辞をしたいばっかりに遥拝させるのだ、と悪口を云う兵もいた。潜水艦が怖いので大言壮言で虚勢を張っているのだろう、と云う説もあった。（遥拝隊長172）

(39′)……*好きらしい。

(40) 殻つきの牡蠣は季節の関係であの夜が結局最後となったが、夏にはずいぶん鮑を楽しんだものであった。男は鮑の耳も腸も好きで、女に全く与え惜しむのを歎んでいるらしかった。で、女のほうでは、鮑の殻の大きいばかりで味わい出の乏しさを激しく味わい楽しんだ。

(骨の肉492)

(40′) ……*歎んでいるらしい。

『遥拝隊長』の例は、「上田五郎」という人物が復員後、出征中の出来事について語った個所であり、『骨の肉』の例は、「男」が去った後で「女」が「男」との生活を回想した個所である。したがって、いずれの助動詞ラシイも作中人物の推量判断に関わるものであるが、その推量判断は場面時ではなく、作中人物の場面時における回想の中の、ある時点において行われたということになる。

以上、本節での観察の結果をまとめると、次のとおりである。

(41) 非1人称小説の地の文における、作中人物の場面時での推量判断に関わる文末の表現として、ラシイとラシカッタとは等価である。

4 結び

前章での観察において、～ラシカッタと「真性モダリティをもたない文」としての～ラシイとは原則的に置き換え可能であった。そのような～ラシイは、～ラシカッタと同様に語りでしか用いられず、語り手の発話時における推量判断でないもの、すなわち語り手の場面時における推量判断や、作中人物の場面時における推量判断を表す。さらに、「真性モダリティをもたない文」としての～ラシイは、通常の話しことばにおいてであれば、(ト)思ウなどの思考引用動詞をともなうべき表現なのである。

(22′) ……数え戻すことができないらしい、と(私には)思われた。

(23′) ……拾っているらしい、と(語り手には)思われた。

(24′) ……生徒であるらしい、と(私には)思われた。

(37′) ……忘れられないらしい、と(幾代には)思われた(のだ)。

(38′) ……切れたらしい、と(女には)思われた(のだ)。

例えば上のようにすると、話しことばでも用いることができる。

これらの事実に基づき、次のように仮定してみよう。

(42) ～ラシカッタは真性モダリティをもたない～ラシイを前提としており、日本語の語りの文体がタをもつ形を標準とするために、それに合わせて～ラシイを過去形にしたものが～ラシカッタである。

すると、～ラシカッタが話しことばにおいて用いられないのは、～ラシカッタの前提に立つ～ラシイがそうなのであるから、当然ということになる(語りであっ

てもタをもつ形を基調としていない文体の場合には、～ラシイを～ラシカッタに変えると不自然になる。cf.(30′)、(31′))。また、ラシカッタという言い方の中のタは、いわゆる「過去」を表すものではなく、「語りのタ」あるいは「文体上のタ」とでも呼ぶほかないものであって、ラシイとラシカッタとの関係が、激シイ；激シカッタ、穏ヤカダ；穏ヤカダッタのような通常の非過去形と過去形の対立とは、全く異なる性格をもっているのであるから、ラシカッタという言い方に通常の文法論的解釈はあてはまらず、単文であるはずの～タラシカッタの中に２回タが現れるのも、この「語りのタ」「文体上のタ」のためである、ということになる。(42)によってはじめて、ラシカッタに見られる文法上・文体上の特徴が同時に説明されるのである。

ラシカッタという言い方の中の助動詞ラシイは言語主体的な推量判断を表している。ただそれは、語り手の発話時におけるものではあり得ない。その点で～ラシカッタと～ラシイとは異なっている（cf.(32)）。このことから結果的に、ラシカッタは「語り手の発話時における」以外の推量判断を表す専用の形となり、さらには(28)、(29)、(39)、(40)のように、「真性モダリティをもたない文」としての～ラシイより、～ラシカッタの方がふさわしいという場合も出て来たものと考えられる。

「語り手（話し手）の発話時における」以外の推量判断を表すためには、話しことばであれば思考引用動詞を必要とする。～ラシカッタは「真性モダリティをもたない文」としての～ラシイとともに、語りにおいて思考引用動詞を用いずに「語り手の発話時における」以外の推量判断を表す、特殊な文体であるといえよう。そのような～ラシイや～ラシカッタの前後には、文脈の中でそれらを支える思考引用表現がしばしば存在し（cf.(28)、(33)、(34)、(35)、(36)、(37)）、またすべての～ラシカッタは～ラシイト思ワレタに置き換えることができる（したがって、ラシカッタの前の非過去形と過去形は、発話時以前の推量判断が行われたある時点を基準として対立する）。語りには通常の話しことばにない表現形式や文体が認められるという事実は、現代日本語および他の言語について、さまざまな研究の指摘するところである（cf.Benveniste 1966、Kuroda 1973、Weinrich 1977、福田1992）。

おわりに

本稿では文末のラシカッタのもつ真の性格を明らかにしてきた。その性格は、カモシレナイ、ニチガイナイ、ヨウダ、ハズダといった形式が完全に１語化して、話し手の推量判断を表す助動詞になりきっているならば、それらの過去形であるカモシレナカッタ、ニチガイナカッタ、ヨウダッタ、ハズダッタ等にも共通する

ものと予想される。そしてこのことは、いわゆる客体的表現と主体的表現とが、あらためて峻別される契機とはならないであろうか。たしかに、ヴォイス、アスペクト、テンスなどの文法カテゴリーには言語主体的な側面があり、その主体性を広い意味で「視点」と呼ぶこともできようが、それは話し手が外界の事態を描き取る際の「描き取り方」であって、描き取った事態についての判断、すなわちモダリティにおける主体性とは次元が異なると考えられ、この両者の相違を、直線的な同一スケール上の程度の差と見ることはできないであろう。少なくとも、ラシカッタ（およびカモシレナカッタ、ニチガイナカッタ等）という言い方が、通常の文法論的解釈の枠内で、客体的表現と主体的表現の連続性の証拠として挙げられることはなくなるべきである。

用例出典

井上靖／他編『日本の短篇』上下（1989、文藝春秋）

参考文献

Benveniste, Emile 1966 *Problèmes de linguistique générale*, Editions Gallimard, Paris, V, 15.（エミール・バンヴェニスト、岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』、1983、みすず書房、V—15）

福田嘉一郎 1992 中世末期口語における～テゴザルと～テゴザッタ——中世語動詞のテンス－アスペクト体系の一斑——（『詞林』11）

金子　弘 1989 動詞＋ラシカッタという言い方をめぐって——会話文・地の文の別と文法カテゴリーの順序——（『山形女子短期大学紀要』21）

———— 1990 文末のラシカッタという表現について——タ止めと推量の主体——（『山形女子短期大学紀要』22）

久野　暲 1978 談話の文法（大修館書店）

Kuroda, S.-Y. 1973 "Where epistemology, style, and grammar meet: a case study from Japanese," Anderson, S.and Kiparsky, P. (eds.), *A Festschrift for Morris Halle*, Holt, Rinehart & Winston, New York.

仁田　義雄 1991 日本語のモダリティと人称（ひつじ書房）、第一章

丹羽　哲也 1992 過去形と叙述の視点（『国語国文』61—9、京都大学）

野田　尚史 1989 真性モダリティをもたない文（仁田義雄／益岡隆志編『日本

語のモダリティ』、くろしお出版）
野村　剛史　1990　文法（理論・現代）（『国語学』161、国語学会）
高橋　太郎　1985　現代日本語動詞のアスペクトとテンス（国立国語研究所報告82、秀英出版）
寺村　秀夫　1984　日本語のシンタクスと意味II（くろしお出版）
渡辺　　実　1971　国語構文論（塙書房）
Weinrich, Harald　1977　*Tempus. Besprochene und erzählte Welt*, 3.Aufl., Verlag W.Kohlhammer, Stuttgart, Berlin, Köln, Mainz.（ハラルト・ヴァインリヒ、脇阪豊／大瀧敏夫／竹島俊之／原野昇共訳『時制論　文学テクストの分析』、1982、紀伊國屋書店）

（ふくだ・よしいちろう　大阪星光学院中・高等学校教諭）